

教育研究業績書

2025年05月07日

所属：教育学科

資格：教授

氏名：日高 俊夫

研究分野	研究内容のキーワード
言語学、英語学、英語教育	語彙意味論、形態論、統語論、語用論、文法教育、国際教育
学位	最終学歴
博士（言語科学）	神戸松蔭女子学院大学 文学研究科 言語科学専攻 博士過程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. Clickerを利用した授業運営	2019年4月～2020年3月	ポータル上にあるClickerを用いて、リアルタイムで多くの学生の解答やコメントを授業中に集約、表示し、それに基づいて議論を進めるといった双方向的な授業を行った。
2. 『英文の基本構造』を用いた読解および英作文演習	2010年4月～現在	『BOST専門英語の手引き』の担当部分を大幅に改訂したものをを用いて読解と英作文の授業に使用している。英語の「主部－述部」を中心とした動詞と項の関係や、前置詞句は名詞句を含んでいても主語になれないこと、同じ接続詞でも名詞節を導く場合、形容詞節を導く場合、副詞節を導く場合があり得、それぞれに文構造が異なっていること、またそれは不定詞や-ing, 過去分詞でも事情が似ていること等を練習問題を解くことによって習得することができる。
3. CALL教室を活用した授業実践	2007年4月2014年3月	CALL教室を利用し、ソフトレコーダーや読解ソフトを用いて音読や暗誦をすることにより「実践的英語力」の養成に努めている。また、語彙の効果的な習得も実践した。
2 作成した教科書、教材		
1. Science Frontiers	2016年3月1日	ESPの観点からの大学初級総合英語教材。主に文法、語法に関わる箇所を担当。著者：服部圭子、日高俊夫、山下弥生、松田佳奈、野口ジュディ) Cengage Learning
2. 英文のしくみと読み方・書き方	2012年～現在	『BOST専門英語の手引き』の担当部分を大幅に改訂したもの。通常の文法書等とは少し違う切り口で英文の基本構造を段階的に習得し、それを読解と英作文につなげられる教材。
3. 生物理工学部 『BOST専門英語の手引き』	2010年4月	生物理工学部の学びに関する専門分野の語彙を集め、Ant Concにかけて精選し、解説すると同時に、生成文法的視点で基礎的な文法をまとめ、読解力の養成を目的とした教材を作成した。（共著者）服部圭子、日高俊夫、山下弥生、村瀬絹代（分担：PP.21-60）
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
	1992年3月 1992年3月	高等学校教諭一種免許状（英語）取得 中学校教諭一種免許状（英語）取得
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 佐賀県立佐賀東高等学校教諭	1995年4月～1997年3月	
2. 佐賀県立武雄高等学校教諭	1992年4月～1995年3月	
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.『最新 英語学・言語学用語辞典』	共	2017年11月	開拓社	英語学・言語学における専門用語を簡潔に解説した辞典。形態論・語彙意味論にかかわる14項目を執筆。(西原 哲雄、中野 弘三、服部 義弘、小野 隆啓(監修))
2 学位論文				
1. Word Formation of Japanese V-V Compounds (博士論文)	単	2011年12月	神戸松蔭女子学院大学文学研究科	語彙的複合動詞の語形成過程を分析した。先行研究ではLCS等の意味構造合成という、単一の意味レベルで形成過程を捉えたのに対し、本論ではPustejovsky(1995)を修正した意味表示を用い、共通の意味述語を基盤にLCSが融合する形成過程と、V1がV2の非命題の意味レベルに導入される形成過程の2つの過程があることを主張し、それを形式化した。
2. Anaphoric Islands and Lexical Semantic Representation (修士論文)	単	1999年3月	関西学院大学文学研究科	「代名詞は語の一部を指せない」という、照応の島の制約を破る英語の例について、先行研究における統語的説明では説明がつかないことを指摘し、語彙の意味構造の観点から精密な説明とモデリングが可能であることを示した。
3 学術論文				
1. 「普通に」における語用論的意味 — 客観化・対人化—	単	2024年10月(予定)	『レキシコン研究の新視点—統語・語用と語の意味の関わり—』開拓社	2000年以降に新しい意味用法が生まれてきたと考えられる「普通に」について、語彙の意味と語用論の関係を踏まえて分析し、新用法と従来の用法の関係性を明らかにした。
2. 英語の軽動詞関連形式における軽動詞性と構文性 — giveを主動詞とした文について—	単	2023年10月	『構文形式と語彙情報』pp. 開拓社 (PP. 232-256)	「軽動詞構文」として扱われることの多い形式の中でもgiveを主動詞とするものを分析対象とし、概念意味論(Jackendoff (1990), 影山(1996) など)および生成語彙論(Pustejovsky (1995) など)の立場から分析した。具体的には、日高(2007)の分析対象を広げ、当該形式でしばしば指摘される「具体的・一般感覚的な意味」「無意識的な反 応」のような意味の出処を明らかにした。
3. 統語的複合動詞「V-切る」「V-ぬく」の意味構造と統語—文法化における比に向けて—	単	2022年3月	『Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS)』No. 25 (神戸松蔭言語科学研究科)	イベント終了付の意味を表す統語的動詞「V-切る」「V-ぬく」の意味と統語構造を比分析した。具体的には、それぞれに2つの形式的語彙登録を仮定することにより、先行研究よりもシンプルかつ明示的・構成的に意味および統語構造が比分析可能であることを示した。さらに、本論の理論装置に基づけば、2つの(補助)動詞の文法化プロセスにおける位置づけにしても比較検討できることを主張した。
4. 文構造に対する認識を踏まえた指導(1) — 中学における制限的関係代名詞を中心に—	単	2020年3月	九州国際大学『国際・経済論集』第5号 (PP. 73-98)	主に中学校における関係代名詞の指導について論じた。具体的には、日本語の連体節と英語の関係代名詞節の対応関係を整理した上で、学習者が理解すべきことを整理し、それを理解させ、習得を促すための具体的教授モデルを提示した。また、最近変化してきていると考えられる現代英語における関係代名詞の用法や中高接続の観点から、本論の教授モデルの妥当性を議論した。
5. 開始を表す複雑述語と複合動詞 — 「V-て来る」「V-だす」「V-始める」の対照 — (査読付)	単	2020年3月	于一楽 他(編)『統語構造と語彙の多角的研究—岸本秀樹教授還暦記念論文集—』(開拓社) (PP. 178-194)	出来事の開始付近の意味を表す「-て来る」「-だす」「-始める」の意味をPustejovsky (1995)を修正した語彙の意味表示モデルを用いて詳細に記述・分析した。具体的には、先行研究の知見を一般化し、3者の意味の違いは、それぞれの(補助)動詞が持つ視点(の有無)やイベントのどの部分を指すかといった命題の意味だけでなく、その命題の意味によって副次的に読み込まれる慣習的推意にもよることを指摘し、その意味をモデル化した。
6. 所有を表すhave got についての語用論的分析	共	2019年8月	九州国際大学『国際・経済論集』第4号 (PP. 1-20)	一般にイギリス英語の口語表現でhaveと同様に所有の意味を表すとされるhave gotを共時的に分析した。具体的には、先行研究(登田1994; Tamura2005等)において、「発話時である現在における(一時的)所有」という概念がhave gotの中核の意味とされるのに対して、本論では発話行為的側面に焦点を当て、have gotは富岡(2010)における「主張行為」を担うことを主張した。このことにより、先行研究におけるhave gotの分布に関する記述を統一的に説明できることを示した。また、have gotが主に用いられるとされる現在時制であっても「主張行為」にあたらぬ場合は容認性が低い一方で、先行研究において容認性が低いとされる「過去時制での使用」「不可分所有」「習慣的狀態」「総称文」においても「主張行為」にあたる場合は容認性が向上する事実や、データに対する先行研究の容認性判断における齟齬が原理的に説明されうることを併せ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
7. 英語の-en 接辞動詞化に関する意味的考察 (査読付)	共	2018年6月	『KLS Proceedings』20 (関西言語学会)	て示した。(共著者：日高俊夫、今西真弓) 形容詞に付加して動詞を形成する-en 接辞による語形成を論じた。基体との関係において「基体が段階的意味を表す」という制約が実際に機能していることを、辞書・コーパスのデータによって示した。また、-enによって形成される動詞のテリシティを形容詞転換動詞と比較しながら分析した。前者の方が基体との意味的關係がより透明であり、離散的变化を表し基本的にテリックとなる一方、後者は連続的变化を表しアテリックとして解釈されることを示した。(共著者) 又吉貴大, 日高俊夫
8. VテVにおける再分析ー複合動詞との統一的分析に向けての覚え書きー	単	2018年6月	九州国際大学『国際・経済論集』第2号 (PP. 1-20)	「押して開ける」「歩いて疲れる」等の「V テ V」複雑述語の統語構造を議論した。具体的には、V テ V の構造は必ずしも一枚岩でないことを仮説とし、主に、対応する語彙的複合動詞との否定に関する振る舞いを比較することによって、V テ V の中でも再分析 (Hopper & Traugott, 2003) を受け、語彙的複合動詞と同様に全体がひとつの統語ユニットと解釈されることが可能なものがあることを示した。
9. Vテイク・Vテクルの多義性と統語	単	2018年3月	『Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS)』No. 21 (神戸松蔭言語科学研究科) (PP. 23-40)	V テイク・V テクルに関する先行研究の多義性分類森田(1994);澤田(2013)をもとに、両形式の多義的な意味と統語構造の関係を議論した。本論が下敷きとする新井・日高(2016)では、V テイクを移動用法とアスペクト用法に分け、前者では主要部移動によってV テイクが形成されNakatani(2013)、後者では再分析Hopper and Traugott (2003)が義務的で、テイクが1つの形態素として語彙挿入されるとする。本論は、新井・日高(2016)に基づきつつ、分析対象をV テクルにも広げ、同じアスペクトを表す例においても、V テイクと異なり、対応するV テクルでは再分析が義務的でないものがあることと、移動を表すV テイク・V テクルの再分析に関する振る舞いの違いを指摘し、再分析における両形式の非対称性を記述した。
10. 統語的複合動詞「V-切る」における意味構造と統語 (査読付)	単	2017年6月	『KLS Proceedings』37 (関西言語学会) (PP. 169-180)	一般にアスペクトを表すとされる統語的複合動詞「V-切る」を分析対象とし、その場合の「切る」の意味構造と「V-切る」の統語構造を明らかにした。具体的には、アスペクト的、モダリティ的な2つの「切る」の語彙登録を仮定し、形式的・構成的な意味合成により、先行研究における直観的な多くの分類を単純化できることと、2つの「切る」は異なる統語構造を取ることを示した。
11. Ambiguous Syntactic V-kake Compounds (査読付)	共	2017年6月	『KLS Proceedings』37 (関西言語学会) (PP. 157-168)	「V-かける」は、「V-だす」や「V-始める」と違って、出来事開始寸前と開始直後を描く用法の多義性が観察され、それが規則的に観察されないという現象を説明した。具体的には補文の出来事の開始時点が話者から「観察可能」であるときはアスペクト補助動詞(開始直後の解釈)として機能し、観察不可であるとき、「-かけ」はモダリティを表す補助動詞(開始寸前の解釈)として機能することを示した。(共著者) 板東美智子, 日高俊夫 (pp.157-168)
12. 韻律と情報構造から見た介入効果ー佐賀方言と東京方言の対照よりー	単	2017年3月	『国際関係学論集』12:1,2 (九州国際大学国際関係学部) (PP. 10-29)	東京方言と違い、佐賀方言では介入効果が働かないことを観察し、そのメカニズムは統語論ではなくTomioka (2007)の主張する韻律と情報構造の対応に関する制約の面から説明されることを、同じく介入効果が働かないアムハラ語の現象 (Eilam 2009) と並行的に論じることによって示した。
13. A Formal Analysis of Japanese V-yuku and its Grammaticalization (査読付)	共	2016年8月	<i>Japanese/Korean Linguistics</i> 23 (CLSI Publications) (PP. 167-181)	現代日本語におけるVユクの限定的な分布は、Vテユクの出現と発達、複合動詞の発達、それに伴うテの意味機能変化という要因による結果であることを示し、その変化が言語発達における形態論と統語論の分化の一例であることを示唆した。(共著者) Arai, Fumihito & Toshio Hidaka
14. Vテイクの再分析に関する統語論的考察 (査読付)	共	2016年6月	『KLS Proceedings』36 (関西言語学会) (PP. 1-12)	「行く」から派生したVテイクの移動用法とアスペクト用法に関し、後者において再分析(reanalysis)が義務的に起こっていることを、統語的テストを根拠に論じた。具体的には後者ではテとイクを1つとする形態統語的变化によって移動用法で想定されたイクの主要部移動が抑制され、「テイク」が機能範疇Deixis Phraseの主要部として統語派生に導入されると主張した。(共著者) 新井文人, 日高俊夫
15. 複合動詞「V-切る」における意味合成	単	2016年3月	『九州国際大学国際関係学論集』	「叩き切る」「読み切る」「冷え切る」のような複合動詞の語形成において、「切る」そのものが持つ意味機能と、V1 の表す意味との

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
16. 「来る」の文法化について－「V(て)来る」のAspect用法 (査読付)	単	2015年6月	11-1,2 (九州国際大学国際関係学部) (PP.1-21) 『KLS Proceedings』 35 (関西言語学会) (PP. 229-240)	単一化のプロセスを形式的に記述・分析することによって、従来の直観的な多くの分類をより単純化することができ、「V-切る」全体の意味を構成的に導出できることを示した。 「V 行く」と「V来(る)」のAspect解釈における容認性の違いは、「行く」と「来る」の文法化における歴史的発達過程の違いに起因することを検証した。具体的には、「行く」が比較的早い時期から文法化が進み、「V 行く」の形でひろくAspectの意味を表すようになったのに対し、「来る」は「V 来(る)」の形ではAspectの意味が発達せず、Aspectの意味が発達したのは「Vて来る」という形が定着した後であることを歴史的資料から検証した。
17. 佐賀方言の疑問助詞と介入効果についての記述	単	2015年3月	『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書』 (2) (国立国語研究所・時空間変異系) (PP. 29-40)	佐賀方言の疑問文の文末に生起する「と」「ね」「こ」「かにゃ」に対して、その意味を東京方言と対照させながら分析するとともに、その中でも「こ」を伴う文が東京方言と異なり、否定の介入効果を示さないことを指摘し、その理由を考察した。
18. On syntax and construal of V-kake constructions (査読付)	共	2015年3月	『Theoretical Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS)』 18 (神戸松蔭言語科学研究所) (PP. 1-12)	統語的補助動詞「かけ」を伴う「走りかける」等の統語構造を考察し、また、複合する動詞によって、その動作の直前あるいは直後の解釈の間で曖昧性を示したり示さなかったりする振る舞いについて「初回最短承認時点」という概念を用いて説明した。(共著者) 板東美智子, 日高俊夫
19. 「形容詞的用法」不定詞の統語と意味解釈について	単	2015年3月	『九州国際大学国際関係学論集』 11-1,2 (九州国際大学国際関係学部) (PP. 103-122)	いわゆる「形容詞的用法」の不定詞の統語構造と意味合成のメカニズムを分析した。関係詞的な例および「～するための」というような意味を表す修飾機能を表すものが関係詞と同様のCP構造を、同格的なものがTP構造を持つことを主張し、それぞれの意味合成の仕方を特質構造(Pustejovsky 1995等)を用いて形式化した。
20. Vユクの統語構造と意味構造 (査読付)	共	2014年6月	『KLS Proceedings』 34 (関西言語学会) (PP. 1-12)	歴史的に本動詞「行く」から「Vテイク」への文法化の中間段階にある「Vユク」の現代日本語における統語構造と意味構造を分析した。統語構造では、ユクが補語にVPを、指定部にpro (視点保持者)を取るDeixis Phraseの主要部をなす構造を示し、意味構造では、語の時間的特性、距離関数、視点関数を導入して分析した。(共著者) 新井文人, 日高俊夫
21. 佐賀方言における疑問標識「こっちゃい」に関する覚え書き	単	2014年3月	『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書』 (1) (国立国語研究所・時空間変異系) (PP. 79-92)	佐賀方言の疑問標識「こっちゃい」が導く節を含む疑問文について、「こっちゃい」が主文では東京方言の「やら」、埋め込み節では「か」に対応しつつも、埋め込まれた場合は東京方言ほどしっかりした補文構造を成しておらず、むしろ注釈節に近いことを示した。
22. 語彙的複合動詞における他動詞化・再帰化 (査読付)	単	2013年3月	『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 外国語編』 3-2 (近畿大学教養・外国語教育センター) (PP. 81-96)	語彙的複合動詞に他動詞化や再帰化が存在することを指摘し、他動詞化は影山 (1996)、再帰化は国広の一連の単純動詞の研究を下敷きにして説明した。基本的には単純動詞と同様の説明が可能であるが、同じ動詞をV2にもつ場合でも、V2に対するV1の意味的貢献の仕方の違いにより他動詞化や再帰化の可否が異なることを示し、それを形式化した。
23. Wh 構文の解釈と韻律構造－佐賀方言と東京方言の対照 (査読付)	共	2013年3月	『Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS)』 16 (神戸松蔭言語科学研究所) (PP. 99-115)	「直哉はマリが誰に会ったか知りたがっているの」のような文の解釈が、東京方言では曖昧(Wh-とYes/No)なのに対して佐賀方言ではYes/No疑問文の解釈しかないと、Wh要素の焦点素性解釈と[+WH]解釈の含意関係として説明した。(共著者) 西垣内泰介, 日高俊夫
24. 日本語動詞における	単	2012年6月	『KLS	日本語動詞の使役起動交替について、先行研究で言われているより

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
使役起動交替のメカニズム (査読付)			Proceedings』32 (関西言語学会) (PP. 81-96)	もシンプルなメカニズムで、特に「自発」の解釈が理論的に形式化できることを示した。
25. 語彙的複合動詞における反使役化と脱使役化 (査読付)	単	2012年3月	『近畿大学教養・外国語教育センター紀要・外国語編』2-2 (PP. 115-130)	語彙的複合動詞の「使役起動交替」が、単純動詞における「反使役化」「脱使役化」(影山 1996)に基づいて説明できることを示した。それに伴い、先行研究において「非主要部」として分析されることの多かった前項動詞が重要な役割を果たすということを主張した。
26. The word formation of so-called “zero-derivational” deverbal nominals: meaning, lexical semantic structure, and argument structure. (査読付)	単	2007年9月	『撰大人文学』15 (PP. 77-92)	先行研究に反して英語の動詞転換名詞には項を継承するものがあることを指摘し、どのような場合に継承するかは基体動詞の意味構造によって予測可能であることを指摘した。
27. Give a ~ の意味構造と生成過程 (査読付)	単	2007年3月	『英米文学』51-2 (関西学院大学英米文学会) (PP. 47-61)	give a shoutのようないわゆる軽動詞構文の生成方法について、補部名詞の意味構造によって異なる2つの生成方法があり、それに応じて補部名詞の統語的振舞いが異なることを指摘した。
28. いわゆる「ゼロ派生」動詞由来名詞の意味構造 (査読付)	単	2003年3月	『英米文学』47-1, 2 (関西学院大学英米文学会) (PP. 291-304)	英語における動詞転換名詞の意味と語形成のプロセスを語彙概念構造の立場から「イベントを表すもの」と「結果産物を表すもの」に大別し、転換名詞の役割は主に後者の意味を表すものであることを示した。
29. デキゴト名詞における語彙的束縛	単	2002年5月	『人文論究』51-1 (関西学院大学文学部) (PP. 147-160)	英語において目的語にイベントの意味を表す名詞句が生じた場合の意味解釈のメカニズムを、語彙概念構造を融合してできる文の概念構造の観点から説明した。
30. 中学・高校における語彙指導についての一提案	単	2000年12月	『Touchstone』11 (関西学院大学文学部英文学科院生会) (PP. 47-56)	意味地図とPustejovsky (1995)の特質構造を融合させた上で、グループワークを用いた、実践的かつ効果的な語彙学習活動を提案した。
31. 照応の島と語彙意味表示 (査読付)	単	2000年6月	『KLS Proceedings』20 (関西言語学会) (PP. 229-239)	Pustejovsky (1995)らの生成語彙意味理論における意味表示を修正利用することにより、英語における当該現象に関して、先行研究の語用論に基づく説明を語彙の意味の問題として捉え直し、精密化した。
32. 日英語における照応の島と接近可能性 (査読付)	単	2000年2月	『英米文学』44-1 (関西学院大学英米文学会) (PP. 26-37)	日英語における照応の島制約の、主に共通点について、語彙の意味構造の観点から説明を与えた。同制約に違反しつつも容認される例はPustejovsky (1995)の語彙意味表示におけるシャドウ項の登録内容が鍵であることを示した。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. グローバル人材としての教員養成を目指して：武庫川女子大学教育学科国際教育コースの実践と課題	単	2022年3月	グローバル人材育成教育学会 第9回全国大会・第2回遠隔国際大会	学部改組により2019年度に新設された本学教育学部教育学科には、幼保・小学校・中学校の保育士・教員養成を目的とした4つのコースがあり、新しい試みの1つとして「国際教育コース」が設置された。本発表は、開設から3年を迎える同コースの学修における中心的役割を担う「国際教育フィールドワーク」の内容を中心に、コロナ禍状況を含めた教育実践を紹介する。そのことを通して、新時代に向けた「グローバル人材としての教員養成」へのあるべき方向性について議論し、課題を提示・検討していきたい(昼休みの時間帯に、関連内容に関して学生によるポスター発表等を行う)
2. 学会発表				
1. 軽動詞関連形式と語用論的含意-giveを主動詞とする例について	単	2023年9月9日	Morphology and Lexicon Forum	「軽動詞構文」とされる文法形式のうちgiveを主動詞とするものについて、概念意味論および生成語彙論の立場から分析した。具体的主張は以下の通りである。 ・補部名詞が出来事を表す場合のみ軽動詞構文として分析すべきで

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
2. 「普通においしい」は何が普通なのか？	共	2022年6月	日本語学会第164回大会	ある。 ・軽動詞構文の場合、Complex Predicate Rule (Jackendoff 1974) によって形成され、その他の場合は通常の変項代入によって形成される。 ・先行研究で指摘される語用論的な意味合いは、補部名詞の非命題の意味から導出する。 「普通においしい」をインターネット検索すると、「期待通り」「なかなか」「そこそこ」「とても・非常に」「お世辞抜きに・素で・他意なく」等、様々に解釈されることが指摘されている。本発表では、このような「普通に」の変化および多義性を、命題内容に対して作用する副詞から命題に対する話者の注釈的コメント、すなわちCI表現への拡張(変化)として捉えてこれらの意味を統一的に関連づけることにより、井本(2011)や西村(2016)等の先行研究の知見を包括できることを示す。また、生成語彙の枠組みを用いてその多義性の形式化を試みた上で統語構造を明らかにするとともに、近代から現代にかけて同様の変化を受けたと考えられる「正直、」の使用データを提示することによって本発表の妥当性を補強する。統語的複合動詞「V-ぬく」における「ぬく」の意味構造の形式化と「V-ぬく」の統語構造を明らかにとした。具体的には、影山(1993)が話者によってVP補文構造とV'補文構造のどちらを取るかにあいて曖昧性があるとし、由本(2005)がVO補文構造と分析しているのに対して、本発表では「られ」を使役の意味を表す形態素としても分析する島山・本田・田中(2018)を援用することによって、「ぬく」は一律にVP補文構造を取ることを示した。意味の面では、2つの「ぬく」の語彙登録を仮定し、形式的・構成的な意味合成の方法を提案した。そのことにより、先行研究における直観的な分類に対して理論的根拠づけを与えつつ再構成し、文法化の側面からもその分類の妥当性を示唆した。
3. 統語的複合動詞「V-ぬく」の意味構造と統語	単	2020年11月	日本語学会大161回大会	いわれる補助動詞としてそれぞれイベントの開始時・終了時を指す「-かけ」「-切る」を分析対象とし、先行研究で言われているアスペクトではなくモダリティを表すものとして分析すべきものがあることを主張した。アスペクトとモダリティの用法を分ける鍵となる概念は「観察可能性」であり、先行動詞の表すイベントが観察不可能な場合にモダリティとして分析され、統語的性質もアスペクト用法の場合とは異なることを示した。
4. The Interface of Aspect and Modality on Event Edges: a Case Study of the Japanese Subsidiary Verbs <i>kake-</i> and <i>kir-</i>	単	2019年7月	Japanese Studies Association of Australia	主にイギリス英語で会話を中心に見られ、「have と全く同じ(exactly the same)意味を表す(Swan 2016)」とされる have got を共時的に分析した。具体的には、先行研究において看過されていると思われる発話行為的側面に焦点を当て、同表現は、富岡(2010)における「主張行為」を要求することを示した(同表現自体が文を主張行為とするような強い力を持つというよりも、主張行為的場面や文脈を要求する一方、単なる事実描写の場合は have の方がより好まれる)。そのことを考慮することによって、先行研究の容認性判断における齟齬が説明され、より精密で妥当な記述的分析が可能になることを論証した。
5. 所有を表すhave got における発話行為性	共	2018年11月	日本語学会第157回大会	開始を表す複雑述語「V-始める」「V-出す」「V-かける」「V-て来る」を対象とし、それぞれの表す意味を形式化した。具体的には、命題の意味のみを持ち、視点が未指定であり、推意を持たないアスペクト専用の「-始める」が開始を表すデフォルト的な表現であるのに対し、「V-出す」「V-かける」「V-て来る」ではそれらの情報がさらに細かく指定されていることを示した。その過程で、少なくとも当該現象において「意図性」をプリミティブな素性として設ける必要はなく、「視点」の値から間接的に読み込まれること、推意の値は、基体動詞の意味や、命題的意味に対する解釈の意味として導出することを示唆した。
6. 複雑述語における命題と推意—開始を表す表現について—	単	2018年6月	日本語学会第156回大会	現代日本語における「V テイク/テクル」について、両形式を対照させながら多義性と統語構造の関係を議論した。新井・日高(2016)は、V テイクを移動用法とアスペクト用法に分け、前者では主要部
7. V テイク・V テクル における多義性と再分析	単	2017年11月	日本語学会第155回大会	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
8. 英語の-en 接辞動詞化に関する意味的考察	共	2017年6月	関西言語学会第42回大会	移動によって V テイクが形成され(Nakatani 2013), 後者では再分析(Hopper & Traugott 2003)が義務的で, テイクが1つの形態素として語彙挿入されるとする。本発表では, 同じアスペクトを表す例に関しても, V テイクと異なり, V テクルでは再分析が義務的でないことを示した。また, 移動を表す V テイク/テクルの再分析 に関する振る舞いの違いを指摘し, それを統一的に説明することを試みた。
9. 韻律と情報構造, 介入効果 – 佐賀方言と東京方言の対照より –	単	2016年6月	日本語学会第152回大会	形容詞に付加して動詞を形成する-en 接尾辞による語形成を論じた。基体との関係において「基体が段階的意味を表す」という制約が実際に機能していることを, 辞書・コーパスのデータによって示した。また, -enによって形成される動詞のテリシティを形容詞転換動詞と比較しながら分析した。前者の方が基体との意味的關係がより透明であり, 離散的变化を表し基本的にテリックとなる一方, 後者は連続的变化を表しアテリックとして解釈されることを示した。(発表者) 又吉貴大, 日高俊夫
10. 統語的複合動詞「V-切る」における意味構造と統語	単	2016年6月	関西言語学会第41回大会	東京方言と違い, 佐賀方言では介入効果が働かないことを観察し, そのメカニズムは統語論ではなくTomioaka (2007)の主張する韻律と情報構造の対応に関する制約の面から説明されることを, 同じく介入効果が働かないアムハラ語の現象 (Eilam 2009) と並行的に論じることによって示した。
11. 統語的複合語「V-かける」の二義性について	共	2016年6月	関西言語学会第41回大会	一般にアスペクトを表すとされる統語的複合動詞「V-切る」の意味構造と「V-切る」の意味構造と統語構造を明らかにした。具体的には, アスペクト的, モダリティ的な2つの「切る」を仮定し, 形式的・構成的な意味合成により, 先行研究における直観的な多くの分類を単純化できることと, 2つの「切る」は異なる統語構造を取ることを主張した。
12. 統語的アスペクト補助動詞が主観性を帯びるとき	共	2016年3月	言語処理学会 第22回年次大会	「V-かける」の, 出来事開始寸前と開始直後を描くという多義性に関して, 補文の出来事の開始時点が話者から「観察可能」であるときはアスペクト補助動詞(開始直後の解釈)として機能し, 観察不可であるとき, 「-かけ」はモダリティを表す補助動詞(開始寸前の解釈)として機能することを示した。(発表者) 坂東美智子, 日高俊夫
13. Vテイクの再分析に関する統語論的考察 (査読付)	共	2015年6月	関西言語学会第40回大会	「V-かける」が出来事開始直後と直前の両方の意味を表すことができることについて, アスペクト的な「かけ」と, そこから派生するモダリティ的な「かけ」の2種類の語彙登録と, 時制を表す「た」と主題句の主要部となる「た」の2種類の「た」を仮定し, それらを組み合わせることにより, 構成的に「V-かける」の意味解釈が導き出せることを示した。(発表者) 坂東美智子, 日高俊夫
14. 文法化における論理的意味と非論理的意味 – 「行く」「来る」の文法化を例に	共	2015年6月	日本語学会第150回大会	Vテイクの移動およびアスペクト用法において統語論的再分析が起こっていることを, Vのみの否定, 尊敬語化, テを跨いだNPI認可, イクの選択的修飾といったテストの結果を根拠に主張した。移動用法では随意的に, アスペクト用法では義務的に再分析が起こることを示した。(発表者) 新井文人, 日高俊夫
15. 文法化における論理的意味と非論理的意味 – 「行く」「来る」の文法化を例に	共	2015年6月	日本語学会第150回大会	「行く/来る」から「Vテイク/Vテクル」への文法化の動機づけとして, Roberts and Roussou (2003)における論理的意味に当たる特質構造内の形式役割の値(語の時間的特性, 距離関数, 視点関数が規定するアスペクチュアリティや直示性)の保持, 非論理的意味に当たる構成役割の値(移動主体や経路を含む語彙概念構造の内容)の消失と捉えた。(発表者) 新井文人, 日高俊夫
16. 統語的アスペクト補助動詞「-かけ」の意味機能	共	2015年3月	言語処理学会 第21回年次大会	「行く/来る」から「Vテイク/Vテクル」への文法化の動機づけとして, Roberts and Roussou (2003)における論理的意味に当たる特質構造内の形式役割の値(語の時間的特性, 距離関数, 視点関数が規定するアスペクチュアリティや直示性)の保持, 非論理的意味に当たる構成役割の値(移動主体や経路を含む語彙概念構造の内容)の消失と捉えた。(発表者) 新井文人, 日高俊夫
16. 統語的アスペクト補助動詞「-かけ」の意味機能	共	2015年3月	言語処理学会 第21回年次大会	「走りかける」等, 活動を表す動詞に「かけ」が付加した場合に, 動作を起こす直前と動作を起こした直後という曖昧性が生じる原因を, 「初回最短承認時点」という概念を用いて説明した。(発表者) 坂東美智子, 日高俊夫

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
17. 「来る」の文法化について－「V(て)来る」のAspect用法	単	2014年6月	関西言語学会第39回大会	「V行く」と「V来(る)」における容認性の違いは、「行く」と「来る」の文法化における歴史的発達過程の違いに起因することを検証した。具体的には、「行く」が比較的早い時期から文法化が進み、「V行く」の形でひろくAspectの意味を表したのに対し、「来る」は「V来(る)」の形ではAspectの意味が発達せず、それが発達したのは「Vて来る」という形が定着した後であることを歴史的資料から検証した。
18. 間接疑問文と「補文性」－佐賀方言の疑問標識を例に	単	2014年6月	日本語学会第148回大会	佐賀方言の疑問のマーカ－「こっちゃい」に関して、主文では「やら」と並行的な振る舞いを示し、補文内では、「か」とある程度並行的な振る舞いを示すものの、格助詞を伴う環境が「か」よりも制限されることから、「こっちゃい」節は統語的に動詞の項にあたる一人前の「名詞節」としての地位を有していないことを主張した。
19. A Formal Analysis of Japanese V-yuku and its Grammaticalization	共	2013年10月	Japanese/Korean Linguistics 23	現代日本語におけるVユクの限定的な分布は、Vテユクの出現と発達、複合動詞の発達、それに伴うテの意味機能変化という要因による結果であることを示し、その変化が言語発達における形態論と統語論の分化の一例であることを示唆した。(発表者) 新井文人、日高俊夫
20. Vユクの統語構造と意味構造	共	2013年6月	関西言語学会第38回大会	「行く」から「V テイク」への中段階にある「V ユク」の現代語における分析。統語構造として、ユクがDeixPの主要部として補語にVP、指定部にpro(視点保持者)を取る構造を提案した。意味構造では、語の時間的特性(Igarashi & Gunji 1998)、距離関数、視点関数を導入して分析し、本研究が「行く」の文法化、また他のテ形述語やAspect動詞の形式的分析へ応用可能であることを示唆した。(発表者) 新井文人、日高俊夫
21. 語彙的複合動詞の自他交替－他動詞化・再帰化を中心に	単	2013年6月	日本語学会第146回大会	語彙的複合動詞にも、単純動詞と同様、他動詞化や再帰化が存在することを指摘し、他動詞化は影山(1996)、再帰化は国広の一連の単独動詞についての研究を下敷きにして、単純動詞と同様の説明が可能であることを示した。また、同じ動詞をV2にもつ場合でも、V2に対するV1の意味的貢献の仕方の違いにより他動詞化や再帰化の可否が異なることを示し、それを形式化した。
22. 「Vテイク」の意味と派生について	共	2012年11月	日本語学会第145回大会	「Vテイク」について、本動詞「行く」(イクA)と「(学校に走って)行く」(イクB)、「((*学校に) 公園で遊んで)行く」(イクC)、「(水が凍って)いく」(イクD)のように多義語として扱いつつ、特質構造を利用した意味派生を提案した。これによって、より自然な形で意味合成を形式化でき、ひろいデータを説明できることを示した。(発表者) 日高俊夫、新井文人
23. 「自己」動詞構文の構造と意味－再帰性と分離不可能所有構文	共	2012年11月	日本語学会第145回大会	「自己批判」等の漢語動詞構文の特性について、「自己」がもたらす統語的・意味的特性は(i)再帰性(ii)目的語に対する影響であることを観察し、この構文は分離不可能所有構文、二重VPの構造を持ち、上位のVPの主要部は発音されないAFFECTという動詞であることを示した。(発表者) 西垣内泰介、阿部雄一郎、日高俊夫
24. 日本語における述部の意味構造と使役起動交替	単	2012年8月	国語研国際シンポジウム「日本語の自他と項交替」(国立国語研究所)	日本語動詞の「使役起動交替」について、Pustejovsky(1995)の特質構造を修正・発展させた意味表示において、補部名詞も含めた「述部」レベルで構成的に交替現象を形式化できることを示した。
25. 語彙的複合動詞における使役起動交替	単	2012年6月	日本語学会第144回大会	語彙的複合動詞の使役起動交替をKudo(2010)の事象の主辞性の考えに基づいて分析し、当該現象は、LCS融合のメカニズムで語彙的複合動詞が形成させると仮定すれば、単純動詞の使役起動交替と同様のメカニズムで説明できることを示した。
26. 日本語動詞における使役起動交替のメカニズム－自動詞化を中心に－	単	2011年6月	関西言語学会第36回大会	日本語動詞の自他交替における自動詞化について、影山(1996)の「反使役化」と「脱使役化」を批判的に検討し、名詞の意味構造も反映すれば、基本的に1つのメカニズムで捉えられることを示した。
27. 語彙的複合動詞の自他交替－V1と項の意味的役割－	単	2010年11月	日本語文法学会第11回大会	語彙的複合動詞の自他交替(特に自動詞化)は、V1とV2のLCSが対等な関係で融合するというメカニズムを仮定すれば、基本的に影山(1996)が単独動詞について提案している「反使役化」と「脱使役化」を用いて説明できることを示した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
28. Wh-構文の解釈と韻律構造－佐賀方言と東京方言の対照より－	共	2010年11月	日本言語学会第141回大会	「直哉はマリが誰に会ったか知りたがっているの」のような文の解釈が、東京方言では曖昧（Wh-とYes/No）なのに対して佐賀方言ではYes/No疑問文の解釈しかないことを、素性付与と音律構造の関係から考察した。（発表者）西垣内泰介，日高俊夫
29. 日本語の語彙的複合動詞の語形成－特質構造における語形成－	単	2010年6月	日本言語学会第140回大会	日本語の語彙的複合動詞には、先行研究のメカニズムとは異なる語彙概念構造における融合のメカニズムで合成されるものと、前項動詞が後項動詞の特質構造の主体役割として導入されるものがあることを示し、それを形式化した。
30. 日本語の語彙的複合動詞の語形成過程	単	2008年7月	Morphology & Lexicon Forum	これまで「語彙的複合動詞」として一枚岩で扱われてきたものにも、語彙概念構造のみのレベルで形成されるものと特質構造の主体役割に基づいて形成されるものがあることを主張した。
31. Conceptual Structure Binding	単	2004年11月	関西学院大学英米文学会大会	John needs help.のような、イベントの意味を表す名詞が動詞の補部としてに生起する構文の中で、そのイベントに含まれる参加者の（逡及的）解釈メカニズムを語彙概念構造における束縛という概念を仮定して説明した。
32. イベント補部と語彙的束縛	単	2004年3月	Morphology & Lexicon Forum	イベントの意味を表す名詞が文中に生起した場合の、そのイベントに含まれる参加者の解釈メカニズムを語彙概念構造に基づいて説明した。
33. 動詞由来名詞の語形成－日本語と英語の語形成を通して－	単	2003年11月	関西学院大学英米文学会大会	英語の、接尾辞を伴う動詞派生名詞と動詞転換名詞、および日本語の漢語動名詞と連用形名詞の意味構造の共通点と相違点について考察し、漢語動名詞は動詞派生名詞と共通点が多く、動詞転換名詞は連用形名詞と共通点が多いことを示した。
34. 「ゼロ派生」動詞由来名詞の意味と「項の継承」	単	2003年3月	Morphology & Lexicon Forum	英語のいわゆる「動詞転換名詞」の意味を詳細に分析し、項の継承の有無が基体動詞の意味から予測可能であることを示した。
35. デキゴト名詞の語彙記述と語彙的束縛	単	2002年11月	日本英語学会第20回大会ステューデントワークショップ	目的語にイベントを表す名詞が生起した文の詳細な意味解釈のメカニズムを語彙概念構造の合成という観点から説明した。
36. Reflexivity and Lexical Binding	単	2000年10月	関西言語学会第24回大会ワークショップ	shave等の、目的語として再帰代名詞の生起が任意になる動詞の意味構造と統語構造の関係を考察し、それらの動詞は語彙概念構造のレベルにおいて再帰的な構造を持つ可能性があることを指摘した。
37. 照応の島と語彙意味表示（査読付）	単	1999年10月	関西言語学会第23回大会	Pustejovsky (1995)らの生成語彙意味理論における意味表示を修正利用することにより、当該現象に関して先行研究である語用論に基づく説明を精密化した。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 佐賀方言における韻律構造と疑問文の容認性について	単	2015年12月	国立国語研究所プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究報告会（国立国語研究所）	東京方言と異なる佐賀方言の現象を記述分析した。具体的には、かきませ、wh島の制約、スルーシング等について議論し、佐賀方言においてはwh句が韻律上の卓立を伴わず、統語構造において間接疑問文が確認たる補文構造を成していないことがこれらの現象において東京方言と異なる振る舞いを示す原因であることを示唆した。
2. 佐賀方言と北九州方言における間接疑問文？補文性とイントネーション？	単	2014年12月	国立国語研究所プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究報告会	東京方言における yes-no 疑問文が否定の介入効果を受け、選択疑問文が wh 要素の介入効果を受けないのに対して、佐賀方言の文が対照的な振る舞いを示す要因として、疑問詞の統語的特性、wh 要素と焦点の関係、否定要素を含む文の韻律パターン等を考え併せ、佐賀方言の間接疑問文における wh 要素や否定要素、補文標識、イントネーションの関係を明らかにした。また、議論の過程で、東京方言と似たアクセントパターンを持つ北九州方言にも触れた。
3. Whと韻律構造から見た佐賀方言における諸現象－東京方言との比較を通して	単	2013年12月	国立国語研究所プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究報告会	東京方言と佐賀方言の間接疑問文における韻律の違いを記述し、前者がShort EPDとLong EPDの2パターンの韻律が可能であり、それによって解釈も異なるのに対して、後者は基本的にShort EPDのみを許すことを観察し、それが両方言の補文標識の文法的性質の違いに基づく統語構造の違いとも関連していることを主張した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
1. 動詞の多義性と文法化の理論的記述・分析—命題的意味, 非命題的意味, 視点的意味—	単	2016年4月～2023年3月	日本学術振興会 科学研究費助成事業 (科研費) 基盤研究(C) 課題番号 16K02652	「文法化」を, 動詞がもともと表す意味が希薄化し, 補助動詞的に用いられてアスペクト的, モダリティ的意味を表すようになることと定義し, その共時的・通時的プロセスの解明および理論的形式化を目的とする。分析対象として, 「溶けゆく(雪)」のような複合動詞と「(雪が)溶けていく」のようなテ形複雑述語を取り上げる。理論装置として, Pustejovsky (1995)の特質構造の中身を「命題的意味」と「非命題的意味」に分割した意味表示を用いて, 「行く・来る」等の「視点」を持つ動詞や, 「かける・しまう」等のイベントの始点や終点に注目する(補助)動詞の意味を整理して記述することを通して, 動詞の意味と文法化の関係を理論的に明らかにする。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2022年4月1日～現在	グローバル人材育成教育学会 関西支部長
2. 2020年2月～現在	グローバル人材育成教育学会
3. 2013年10月～2016年3月	国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」共同研究員
4. 2010年4月～現在	日本語学会
5. 1997年10月～現在	関西言語学会
6. 1997年4月～現在	日本英語学会